

ポリクリを終えて 早期臨床実習を終えて

ポリクリを終えて

5年 植木 信久

歯学部に入學した当時、先輩から“ポリクリ”という言葉聞き、漠然とその意味を考えていた。「学生同士で歯を削る」などとは聞いていたが、その時の自分には予想のつかない事であった。学年が上がり、病院に足を踏み入れるようになると、先輩方があの独特の帽子をかぶり臨床で学んでいる姿を見かけるようになった。「これが、ポリクリなんだ」と当時は思ったものであった。しかし、それが今ではポリクリを終えて、総合診療室で患者さんを診させていただいている。時が経つのは早いものである。

特に、ポリクリに上がってからは、時が経つのを大変早く感じた。5年生の始めに臨床実習ガイドブックというものが渡され、約7ヶ月に渡るポリクリ（臨床予備実習）が始まった。ポリクリでは、実際に先生の治療を見学、介助、学生同士の相互実習などを行った。それまでの講義や実習を通じて、ある程度の知識は身につけているはずであったが、実際に先生の処置を見学したり、患者さんに接する機会を得ると初めての経験ばかりで、戸惑う事がたくさんあった。

本実習に上がってからもいえることであるが、次に何をすべきかを考えて行動することが必要であると感じる。先生の介助では、次にどのような処置を行うかを考えて、適切な器具の準備、パキュームを置く位置を移動する必要がある。また、患者さんに対しては、気配りということが大切である。病院には、様々な疾患のある患者さんがいらしているわけで、患者さんの要求することに適切に応えられるべきである。確かに、これらを実践することは難しいことだと思うし、先生方から厳しい指導を受けることもあると思う。ただ、ポ

リクリ期間を通して、見学させていただいた先生方の患者さんへの対応というのは、学ぶところが多く、貴重な体験であった。本実習に上がるまでに、先生方からいろいろなことを吸収するべきである。自ら積極的に学ぶ姿勢を持つことで、吸収することはより多くなると思う。今、振り返ってみても、あの時、先生の治療をもっと注意深く見学しておけばよかったと思うところがある。

学生同士の相互実習では、自分が患者さんの立場を経験できるという点で非常に意義のあるものであった。特に、伝達麻酔、レントゲン撮影、レジン充填、スケーリング実習などは緊張し、相手の反応などが大変気になった。自分では気がつかないところで相手に不快な思いをさせることもあるという事が分かった。

今後も、ポリクリで学んだことを活かし、さらに学んでいくことで、一歩ずつでも立派な歯科医師に近づくように励みたいと思う。同時に、患者さんを思いやる気持ちを忘れないようにしたい。

総診での臨床実習

5年 出口 知也

「臨床予備実習（ポリクリ）を終えて」、「総診での臨床実習」……。自分が歯学部ニュースにこういう内容の文章を書くようになったのだと考えると、月日の経つのは早いものだと思う。

過去の歯学部ニュースを思い起こしてみると、当時の新6年生が書いている内容は主に、「実際に診療を経験することの重要性」であったように思う。そのことについては私も同感である。この原稿を書いている頃（1月下旬）、私は歯内治療などを行っているが、「単に知識として知っている、本で読んだことがある（1～4年生）」、「一回でも体験したことがある（5、6年生）」、「毎日のように

何度も経験している（熟練した歯科医師）」、これら三者の間には大きな差があることを痛感する。

反省点を挙げればキリがないが、全体的にいえることは、「目の前の作業だけに気をとられて、周りが見えていない。」ということである。ファントムを使った練習とは違い、本物の人間に対する診療では、口腔内の処置を行う部位だけでなく、全身への気配りが重要である。

今の私の場合は、「歯を削ること」、「吸引すること」、「セメントを練ること」などに手一杯になっているように思う。歯科治療の最終目的は、個々の作業を行うことではなく、患者の口腔内の衛生状態を良好に保ち、咀嚼機能を改善し、ひいてはQOL、ADLを向上させることである。

今のレベルでは、全てのことを自分ひとりで行うことは難しい。インストラクターの指導や手助けが必要な場合が多々あり、患者に長期間、何度も通院してもらわねばならないことも充分考えられる。しかし、途中で諦めることなく、総診での実習を通して、より多くのことを学びたい。

基礎実習やポリクリでは、「後でやれば何とかかなる」というように考えて怠けてばかりだった。しかしながら、学問、研究は日進月歩し、新しい技術や材料が次々と開発され、世の中に出てきている。これからは、そういった流れに遅れをとらないように頑張っていきたい。

卒業後の進路については、「大学院に進学する。」ぐらいのことしか、まだ決めていない。そういったことも臨床実習を通して、じっくりと考えていこうと思う。

「早期臨床実習を終えて」

2年 尾田 怜子

早期体験実習。最初は白衣姿で病院内を歩ける

ということだけで大満足。2年目にしてようやく訪れた歯学生らしい雰囲気漂う水曜の午前中を楽しみにしていました。まず、病院の大きさに驚かされました。町の歯科医院にしかお世話になったことがなかったので、歯科だけで様々に分科した大病院は不思議な感じがしました。補綴科では最終的な補綴物を入れる前の仮歯を作るところを見せていただきましたが、ほんの数分で患者さんにぴったりフィットする仮歯ができてあがったときはその技術に感動し、その日は片っ端から高校時代の友人や両親に感動のおすそ分けをしたことを覚えています。

また口腔外科の見学では自分の持っていた歯科医に対するイメージが大きく変わりました。歯科医の仕事といえば虫歯治療！ぐらいの考えしかありませんでしたが、口腔癌・口蓋裂の手術や、歯科病室を見学して口腔領域のスペシャリストとして様々な疾患に立ち向かうのが歯科医なんだと思い知りました。見学中に先生たちがおっしゃった言葉も忘れられません。歯科は医科に比べて扱う範囲は広くないが、摂食・発話など生活の質に直接関わってくる顎顔面口腔領域の疾患は患者さんにとってとくに大きな悩みの種になる分、歯科に期待されるものは大きいと聞いてやる気がわいてきたり…。治療行為はすべて学問的な裏付けのもとに行われているのだから、学生のうちに一生懸命勉強しなくてはいけないと注意され反省したり…。

何の予備知識も持たずに臨んだ実習でしたが、それだけにいろんなことを素直な驚きとともに吸収できたような気がします。ただ3時間の立ちっぱなしは正直なところ辛かったです。保存科の見学では貧血で倒れ、看護婦さんに多大なるご迷惑をおかけしました。良い歯科医になる為には体力づくりと朝食もおろそかにはできませんね。